

第29回学会大会テーマおよび講演企画の趣旨

学会前理事長 鈴木 秀 雄

(関東学院大学)

学会大会テーマおよび講演企画の趣旨について

‘94以降における学会大会テーマ^{※1)}は、それぞれ「21世紀を迎えるレジャー・レクリエーション環境」(於：拓殖大学北海道短期大学、第24回、1994年)；「新しい時代の創造的余暇」(於：関東学院大学、第25回記念大会、1995年)；「高齢社会におけるレジャー・レクリエーション研究と教育への期待」(於：奈良女子大学、第26回大会、1996年)；「レジャー・レクリエーション指導者育成と高等教育機関の役割」(於：東京農業大学、第27回大会、1997年)；そして「国際交流時代のレジャー・レクリエーション」(於：福岡大学、第28回大会、1998年)であった。

前回の学会では、これまで国際交流の推進は一般的に、外務省をはじめとする公的分野の役割であると思われてきたが、情報と交通のグローバル・ネットワーク化により、NGO(非政府団体)、NPO(非営利組織)など私的部門の果たす役割が大きくなったことを指摘した。さきの長野オリンピックやフランスでのFIFAワールドカップにもみられるように、国際交流プロジェクトの実施にあたっては、市民の積極的な協力・支援がきわめて重要になっている。福岡においても、1995年夏季ユニバーシアードの開催にあたり、市民のボランティア活動が大会の成功に大きく貢献したことが高く評価された。

レジャー・レクリエーション活動は、原則的には個人が個別の活動への参加を向上させていくことが重要であることは言うまでもないが、市民が、単なる遊びでもなければ、強制される仕事でもない、いわゆる主体的かつ創造的な社会参加型あるいは社会貢献型の活動を通して国際交流プロジェクトに関わることも、レジャー・レクリエーションとして意義深いもので、このような活動を経験した人たちは、一様に異文化の相互理解、国際交流への寄与に深い喜びを感じとっている。国際交流プロジェクトは、市民にとって、「世界・異文化・国際社会」を知るよい機会であり、また「日本・地域・自己」のアイデンティティに気づくよい機会でもある。今後の国際交流プロジェクト推進の良きサポーター(地域・団体・個人)の育成に本学会が積極的に貢献することが重要であることが論じられた。

学会の共通言語であるレジャー・レクリエーションを掲げての‘94年以降のテーマであり、環境、活動、

教育・研究、育成、交流等それぞれに重要なキーワードを掲げて課題解決や問題意識の提供を試みてきたが、第29回学会大会においてスポーツを取り上げた意図は、現代社会の中で、レジャー活動の身体的領域に存在するスポーツは、最早、単一の文化形成ではなく多領域に及ぶ複合的な存在であり、家庭、学校、地域、職域などあらゆる場面で耳目に接し、また直接的、間接的な関係を問わず生活の中で何らかの接点を有しているからである。スポーツは、「したり」、「見たり」、「聞いたり」、「読んだり」、「話したり」と共通な話題としての意味合いを強く持つ存在であり、スポーツが単に趣味の世界にとどまらず、多くの分野に影響を与え、時には経済的側面で捉えられ、時には社会にセンセーションを起こし、人の生き方や考え方にまでその影響が及ぶほどの意味合いを持つ出来事を醸し出すからである。またそこにメディアが深い関わりを持ってもいる。

例えば、バブル経済崩壊後その存続が危うく^{※2)}なってきた企業スポーツも、企業が抱える社員選手による運動部として日本のスポーツ強化を支えてきたが、その「独特の枠組み」も大きな曲がり角に差し掛かっている。もとはといえば企業がレクリエーションや健康促進のために始め、1950年代半ばからの高度経済成長期にはチームをシンボル化し、従業員の士気を高める働きを持たせ、労使対立が厳しかった時代には、労務対策の役割も担ってきた。さらに1964年東京五輪を契機にスポーツ人気が高まると、テレビの普及もありチームは広告塔へと変身した。時代を移すように花形企業の中で盛んとなった企業スポーツも、バブル経済崩壊と共に凋落傾向を示し、企業側は撤退の理由を「業績不振」と強調するが、それは単なる引き金であり、すでに運動部を持つ意味が薄くなった側面が大きい。愛社精神が希薄な世代には社員の士気高揚の効果はなく、スポーツ界のプロ化や国際化で注目度の落ちたアマチュア競技は、広告塔の役割もしなくなったのである。選手や競技団体は、経営判断の前になすすべはなく、日本のスポーツ基盤の根底が揺らいでいる。サッカーJリーグのようなクラブ組織など、新しい「枠組み」の整備が求められている。

国においてもスポーツに対する施策である、「スポーツ振興基本計画」が出され、豊かなスポーツ環境を目